歴史探訪

地域の絆「念仏講まんじゅう」

1982年長崎豪雨災害における犠牲者ゼロの背景

松井 宗廣
まつい むねひろ
(財)砂防・地すべり技術センター
砂防技術研究所長

1 はじめに

死者・行方不明者299名を数え空前絶後とも言える未曾有の大災害、長崎豪雨災害は1982年7月に発生した。299名の被災原因は、土砂災害が262名(87.6%)、浸水氾濫が37名(12.4%)で、土砂災害による犠牲者が大部分を占めた。人的被害の実態からは、長崎豪雨災害は「長崎土砂災害」であったといえる。土砂災害により数多くの尊い人命が奪われたが、土石流が発生し集落は甚大な被害を受けたにもかかわらず、人命は全く失われなかった地区がある。その地区とは長崎市太田尾(おおたお)町(旧茂木(もぎ)村)山川河内(さんせんごうち)地区である。江戸時代末期(万延元年、1860年)に32名の犠牲者を出した土砂災害を教訓に、前兆現象などを「言い伝えとして」受け継ぐとともに、毎月14日に供養のための念仏講まんじゅう写真-1を集落全体に配るという取り組みを現在まで約一世紀半にわたり継続的に続けてきている。長崎豪雨災害時には地区が土石流に襲われたにもかかわらず、住民は適切に避難して死者ゼロという結果につながったのはこの取り組みが続けられていたことと起因していると考えられる。

近年、公共事業予算の縮減が続き、構造物による対策(ハード対策)が困難になりつつある現状において、土

写真-1 念仏講まんじゅう

砂災害が起きても人的被害をゼロするためには警戒避難(ソフト対策)の確実な実施が望まれる。その意味で、住民自ら警戒避難体制を継続的に保持し続けている模範的事例であると考えられる。

2 長崎豪雨災害

1)気象概要[1)]

1982年の長崎地方は4月から少雨傾向が続いた。九州北部地方の6月の降水量も例年よりかなり少なく、長崎市も同様で6月の1ヶ月間に1mm以上の雨が降った日はわずかに4日しかなく、月間の降水量は66mm(6月の平均:333.7mm)と極端に少なかった。九州北部の各気象台は、7月2日に「少雨に関する気象情報」を発表し、節水を呼びかけた。しかし、7月10日夜からは一転して、梅雨らしい天気になった。10日夜から20日にかけては、連日のように九州地方のどこかで大雨が降った。23日になると、東シナ海北部に進んできた低気圧に伴って梅雨前線が九州北部において活発化し、長崎を中心に記録的な豪雨をもたらし、未曾有の大災害を発生させた。

長崎市内では23日午後5時を過ぎると雷を伴った強い雨が降り出した。午後7時を過ぎると雨脚は一段と強さを増して滝のように降る雨となり視界も遮られるような状況となった。

また、それまで南下しつつあった雨雲は長崎県南部で停滞した。その結果、長崎海洋気象台では、午後8時までの1時間に111.5mm、午後9時までに102mm、午後10時までに99.5mm、この3時間で313mmの豪雨となった図-1。

このわずか3時間における雨量の合計は6月の1ヶ月降水量に匹敵する量となり、長崎市周辺に悲惨な災害をもたらした図-2。

長崎県長与町役場においては、現在でも観測史上最大の1時間雨量である187mm(3日午後7時から8時までの1時間)という猛烈な雨を記録した表-1。

図-1 長崎市(長崎海洋気象台)の降水経過(1982年7月23日~24日)

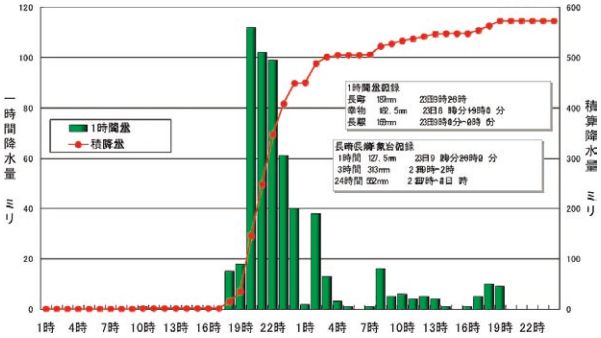


図-2 降水量分布図(1982年7月23日)

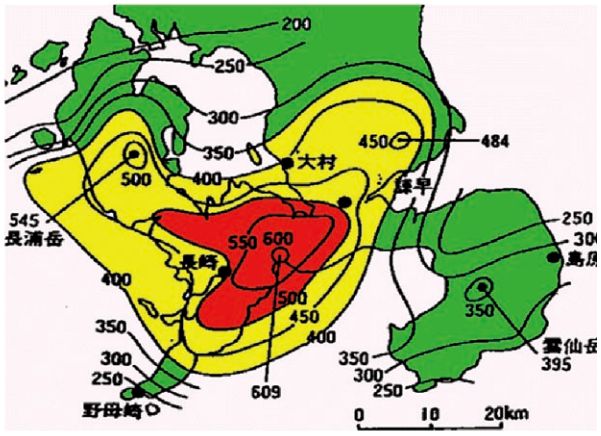


表-1 国内における1時間降水量の記録

順位	地名(県名)	降水量(mm)	発生日	時間	気象現象
1	長与(長崎)	187.0	1982.7.23	19:00~20:00	前線(長崎豪雨)
2	福井(徳島)	167.2	1952.3.22	20:50~21:50	低気圧
3	富士宮(静岡)	153.0	1972.8.24	14:50~15:50	雷雨
4	佐原(千葉)	152.5	1999.10.27	19:00~20:00	低気圧
5	多良間(沖縄)	152.5	1988.4.28	15:00~16:00	低気圧

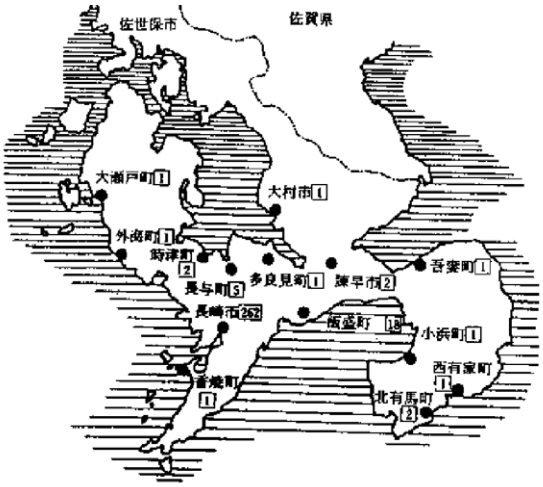
2)被害状況

多数の犠牲者の他、ライフライン(上水道, 電気, ガス, 電話)、土木関係施設、教育施設、文化財、医療施設、商工・観光業関係、農林水産業、土木関係など多岐の分野で甚大な被害があった。被害総額は長崎県全体で3153億円(うち長崎市内2093億円)に上った[2),3)]。

(1)人的被害[2)]

長崎県内の死者・行方不明者は299名、重傷者16名、軽傷者789名に上った。地域的には長崎市内での死者・

図-3 長崎県下の死者・行方不明者の分布図[4)]



行方不明者が262名(87.6%)と被害の大部分を占め、豪雨による被害が長崎市内を中心に発生した図-3。

(2)住家被害[2)]

土砂崩れや浸水氾濫により多数の住家が被害を受けた。長崎県内で全壊家屋584棟、半壊954棟、一部破損1,111棟、床上浸水1万7909棟、床下浸水1万9197棟に上った。被害金額は、全壊家屋65億円、半壊47億円、一部破損10億円、床上浸水229億円、床下浸水26億円など、総額431億円に達した。

3
長崎豪雨災害時の山川河内地区

上記のように長崎市では同時多発的に土砂災害が頻発図-4し、262名もの犠牲者が出たが、山川河内地区図-4、5では住民自らが警戒避難行動をとった結果、土石流が発生したにもかかわらず人的被害はゼロであった。この地区は長崎市の西に位置し、南に橘湾を望む現在は33世帯が暮らす山間の集落で、周りは緑豊かな山に取り囲まれ、段々畑では花卉が栽培されているのどかな農村である写真-2。この地区に隣接している芒塚(すすきづか)地区は長崎豪雨時に土石流等により17名もの犠牲者を出し壊滅的被害を受けた写真-3。

災害直後、長崎県の技術者としてこの地区の災害調査を行った川原孝氏(元長崎県諫早土木事務所長)によると、「土石が人家まで押し寄せているし、家屋の崩壊もあるのに、なぜ、1人の負傷者も出さなかったか、当時から不思議であった[1)]。」ということである。近年、同氏はこの地区を再度訪ね、当時の自治会長に、7月23日の状況を聞き取っている。同氏はこれついて、参考文献[1)]のコラムで次のように紹介している(一部加筆修正)。

「昔からの言い伝えどおりに避難した。」「崩れる前兆として、山がゆれた。においがした。石垣の水が泥水に変わった。」これを見た自治会長は、皆を集合させ、山の稜線に逃げた。午後6時30分頃であった。まだ明るかった。普段から避難場所を決めていたようである。私がみたところ周囲は危険な場所ばかりである。自治会長が言うには、「災害で最も大切なことは、逃げる時機を逸しないことだ。」という答えが返ってきた。なぜ危ないこ

図-4 長崎豪雨災害時置図の土砂災害箇所

図-5 位置図

写真-2 現在の山川河内

写真-3 長崎豪雨による山川河内地区の災害状況

とがわかったのだろうか。それにはこの地区での習慣を知る必要がある。1月にその年の願をかける。不動さん、山の神、馬頭観音、お大師……など11箇所をまわる「願立て」である。８月には、災害、厄病がなかったことの御礼として、「願成就(がんじょうじゅ)」祭が行われている。ここまでは,災害を蒙ったところでは普通行われる行事である。しかし、毎月14日(江戸期の大災害時に捜索が打ち切られた日)には、「念仏講饅頭」写真-1を各家庭に持ち回りで配っている。なんと現在に至る約150年間も、それも毎月行われているのである。

33世帯なので、饅頭を作る番は３年ごとに回ってくる。一家総出で饅頭を作ったという。若者はなぜ饅頭が毎月くるのか、意味が不明であった。ある時期、時代に合わないから中止の声があがった。しかし、このとき古老や自治会の役員たちが、昔の災害の状況をこと細かく聞かせ、理解させている。だから今もって続けていられる。

過去の災害とは、万延元年(1860年)4月9日、圧死者32名、牛馬13頭が同時溺死する大災害のことである。この時、現在も市内を流れる中島川では、長久橋(眼鏡橋より700m下流)が流失した。このときの豪雨状況に関する文献は見当たらないが、茂木の玉台寺(ぎょくたいじ)の過去帳には「三千河内」と書かれている。7ページにわたり死者の名前と年齢が記載されている。平成21年は、150周忌にあたり供養を計画している、とのことである。

災害復旧工事として、ここ山川河内では砂防ダム3基を完成させた。そのうちの1つは、150年前の災害箇所の逃底川(ぬげそこがわ)であった。いかにも災害が起こりそうな地名・小川である。「ダムが3基もできて安全であろう」と言うと、「この地区では安全なところはない」と自治会長は言う。

今後の避難は「2基目の砂防ダムから水が出たら逃げる。」とのことを地区で確認しあっている。

今年(平成21年)は、万延元年(1860年)から数えて150周忌にあたる。去る7月14日に楠山自治会長の了承を得て、節目となる法要に参加させていただき最近の状況を伺うことができた。法要に先立ち、朝からは地区総出で水源や川の清掃が行われた。

午前10時からは玉台寺住職を招いて公民館において法要、その後、地区内の墓地に建てられている当時の犠牲者を慰霊する木製の角塔婆が10年ぶりに新しく建替えられ、供養がとり行われた写真-4、5。

その後、公民館で直会が催され、自治会長をはじめとする皆さんからいろいろな話を伺うことができた。いくつか印象に残ったものを紹介すると、

①山間の狭隘な地区に住んでいるので、地区住民は常に土砂災害の危険性を意識している。

②現在も雨が降ると自分たち自身で雨の降り方、川の様子、砂防ダムからの水の出かた等に注意を払って、危ないと感じたら早めに逃げるように心がけている。

③自分の命は自分で守らなければいけないという認識がある。人が助けてくれると思っていない。危険な時には他の人たちも自分のことで精一杯だろうから。

写真-4,5 供養塔前での法要

④この地区一帯は土砂災害防止のための警戒区域に指定されており、1世帯を除いてすべての家が区域内に入っている。

⑤長崎災害後に建設してもらった地区の上流にある砂防ダムは本当に心強い、この地区はダムのお陰で本当に助かっていると思う。安心感がある 写真-6 。

⑥現在、最下段の水抜きが土砂で詰まってしまっている。ダム上流に土砂を貯める空きはまだあるが、できれば掘ってもらいたいと思っている。

⑦2基目の砂防ダムとは地区上流の一番大きいダムで、水が出たら逃げるというのは、そのダムの「下から2段目の水抜きから出る水の勢い」、「一番上の台形のところ(水通し)から水が流れ出した場合」と考えている 写真-7 。

⑧念仏講饅頭は古くは煮豆、串団子、餅、饅頭などが地区中に配られ供養されたが、現在は饅頭、串団子を配っている。

また、玉台寺住職から万延元年(1860年)の土砂災害 写真-8 の状況について過去帳に記載されている内容を教えていただいた。それによると

「庚猿(かのえさる)7月9日、朝正五つ時(現在の7～9時)三千河内、山潮湧出、横20間、縦200間余流土、人家7件土中埋、死亡32名、左のとおり(略)牛馬13霊同時溺死、2名亡同日」とのことである。なお、13日に捜索が打ち切られ(不明9名)たので、14日に供養の饅頭を配るようにしたということである[5)]。

写真-6 地区の上流の砂防ダム

写真-7 2段目の水抜きからの流水

写真-8 砂防ダム地点上流から逃底川を臨む

4 おわりに

この地区の取り組みから汲み取るべき教訓として、

①過去の災害を忘れず伝承していくこと

②災害から受け継がれている言い伝え（前兆現象など）を忘れないこと

③前兆現象に注意を払い、避難のタイミングを逸しないという心構え

④それらを継続して保持していくこと

⑤地区としての結束力の強さ

などがあげられよう。

「念仏講饅頭」の目的は江戸末期の土砂災害による被災者を供養するためであるが、「二度と犠牲者をさない」という地区としての意思を住民みんなで毎月再確認し、そしてその意志を一世紀半の時を超えてさらに未来へとつないでいくメッセンジャーとしての大事な役割を担っているといえよう。

日本全国の数十万にのぼる膨大な土砂災害危険箇所数を考えた時、気の遠くなるような高いハードルであると言わざるを得ないが、土砂災害の危険地域内に住む全ての住民がこの地区の持続的な取り組みに学び、大雨などの場合に的確に避難することができるような仕組み創りを強力に進めていくことが望まれる。

文末となりましたが、150年の節目にあたる法要にあたり、最近の地区の状況等について終始、懇切丁寧に対応していただいた楠山自治会長をはじめとする地区住民の皆様、万延元年(1860年)の土砂災害の状況について過去帳の記述内容についてお教えいただいた玉台寺住職様に、記して深く感謝いたします。

★参考文献

1　内閣府：1982年長崎豪雨災害報告書,平成16年12月

2　長崎県：7.23長崎大水害の記録, 1984.3.

3　長崎市：7.23長崎大水害誌, 1984.3.

4　長崎大学学術調査団：昭和57年７月長崎豪雨による災害の調査報告書, 全145頁, 1982.11.

5　玉台寺：ともしび,第127号,2004.9.